

net 1

煙突の「ゆ」の字をぬらす春の雨

~~川~~が曲り鐵路がくねり春の山

山笑ふ千年ぶりに掘り出され

山国に水迸る蝶々かな

呼び寄せて雲雀と遊ぶ天使かな

七曜に満たざる花の盛かな

こんこんと泉古くて新しき

われの銀河なれの銀河へ重なりぬ

包丁に林檎の種が付いてをる

頂上に
この正の
山笑ふ 1.6

おエ

指雲雀 天使の目に 1.6

遊ぶかな

麗がやりボンは解いてもリボン 雲水の峠を越ゆる蝶々かな

啓蟄や鳥籠に散る鳥の餌 山国に水迸る蝶々かな

煙突の「ゆ」の字をぬらす春の雨 すみれ草遊んでくれてありがたう

春雨や貝の隠るる砂の中 花すみれ遊んでくれてありがたう

山笑ふまだ覚めやらぬ出土品 れんげ草遊んでくれてありがたう

山頂に望遠鏡や山笑ふ たんぽぽと遊んでくれてありがたう

その上に展望台や山笑ふ 七曜に満たざる花の盛かな

これがまあ栄華の跡か山笑ふ こんこんと泉古くて新しき

三代の栄華の跡か山笑ふ 落ちて行くミルクよアイスコーヒーよ

亀鳴くや浦島翁を懐しみ 珈琲の氷の間をミルク落つ

発振と迷えしものよし等々
と等々

アーノルド・シユワルツェネツガーラム
飲 暮

火が点いて忽ち火蛾や燃えて消ゆ

われの銀河なれの銀河へ重なりぬ

童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声

包丁に林檎の種が付いてをる

推敲????花も葉もなき桜かな

賀と書いて賀状となせり水仙花

麗かやりボンを解く指の先 その中のひとときは小さき裸かな
 煙突の「ゆ」の字をぬらす春の雨 火が点いて忽ち火蛾や燃えて消ゆ
 発掘を逃れし壺や山笑ふ われの銀河なれの銀河へ重なりぬ
 亀鳴くや浦島翁を懐しみ 童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声
 雲水の峠を越ゆる蝶々かな 包丁に林檎の種が付いてをる
 花すみれ遊んでくれてありがたう 頂上に展望台や山眠る
 たんぽぽと遊んでくれてありがたう 推敲????花も葉もなき桜かな
 こんこんと泉古くて新しき 賀と書いて賀状なりけり水仙花
 珈琲の氷を滑るミルクかな
 アーノルド・シユワルツエネツガーラム
 飲む

まぬがわろ

麗かやりボンを解く指の先切株に地図を広げて雲の峰

煙突の「ゆ」の字をぬらす春の雨 **こ**んこんと泉古くて新しき

発掘を逃れし壺や山笑ふ 珈琲の氷を滑るミルクかな

亀鳴くや浦島翁を懐しみ **す**やすやと赤子ほのかに天花粉

雲水の峠を越ゆる蝶々かな **ア**ーノルド・シユワルツエネツガーラム

花すみれ遊んでくれてありがたう 日曜と少し思ひぬ 夏休

すみれ草遊んでくれてありがたう **そ**の中のひときは小さき裸かな

れんげ草遊んでくれてありがたう **踏**切のかんかん照りの終戦日

たんぽぽと遊んでくれてありがたう 兜虫白く大きな皿の上

七曜に満たざる花の盛かな 尾頭の尾の絢爛の金魚かな

ネー 飲 む

煙突の「ゆ」の字をぬらす春の雨 端居する人なきままに日が暮れて
 発掘を逃れし壺や山笑ふ その中のひときは小さき裸かな
 密やかに秘かに神の梅見かな 半袖の亜米利加人や巴里祭
 草餅のまだ暖かに子らを待つ 羽田空港四万六千日の晴れ
 雲水の峠を越ゆる蝶々かな 蟻一つ浮んでゐたる水たまり
 おのづから時の満ち来る桜かな 胴体の長きを運ぶ蜥蜴かな
 花守の為す術もなき花の漏り 終列車遣り過したる螢かな
 雲の峰太くて重き乾電池 薔薇園の開園を待つ鉄扉かな
 こんこんと泉古くて新しき 牡丹やどかと置かれしランドセル
 すやすやと赤子ほのかに天花粉 赤で消し赤で書き足す夜長かな

親玉の如き池や雲の峰
 赤で消し赤で書き足す夜長かな

赤で消し赤で書き足す夜長かな
 赤で消し赤で書き足す夜長かな

角川賞 2018 Ver. 2018 Ch 12 32句 2

2018年5月12日 22:55

10行 2段 桐9

われの銀河なれの銀河へ重なりぬ 太陽と同じ丸顔雪達磨
踏切のかんかん照りの終戦日 ~~打ち興~~ あはははははと初笑
干柿に遠き西日となりにけり
童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声
菜箸と同じ長さの秋刀魚かな
包丁に林檎の種が付いてをる
切株に雪の帽子を被せやる
圧巻の雪にひしやげし竹林
土くれの中の石ころ枯野原
来年は年号変る炬燵かな

Heally?

ヤブ?

煙突の「ゆ」の字をぬらす春の雨すやすやと赤子ほのかに天花粉
切株の春の雨こそ明るけれ端居する人なきままに日が暮れて
発掘を逃れし壺や山笑ふその中のひときは小さき裸かな
密やかに秘かに神の梅見かな半袖の亜米利加人や巴里祭
草餅のまだ暖かに子らを待つ羽田空港四万六千日の晴れ
雲水の峠を越ゆる蝶々かな蟻一つ浮んでゐたる水たまり
おのづから時の満ち来る桜かな顔（ひと）を先頭にして蛇進む
花守の（も）為す術（えん）もなき花の漏り螢舞（ぶ）彼方に消ゆる終列車
切株の（後）儂（の）き夢（の）を夏（の）の月（の）薔薇園の開園を待つ鉄扉かな
こんこんと泉古くて新しき牡丹やどかと置かれしランドセル

赤で消し赤で書き足す夜長かな
年号の来年変る炬燵かな
われの銀河なれの銀河へ重なりぬ
太陽と同じ丸顔雪達磨
踏切のかんかん照りの終戦日
干柿に遠き西日となりにけり
童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声
切株の根反の全と従へて開やや虫のの声
菜箸と同じ長さの秋刀魚なり
包丁に林檎の種が付いてをる
切株に雪の帽子を被せやる
土くれの中の石ころ枯野原

発掘を逃れし壺や山笑ふこんこんと泉古くて新しき
煙突の「ゆ」の字をぬらす春の雨蟻一つ浮んでゐたる水たまり
切株の春の雨こそ明るけれ顔を先頭にして蛇進む
密やかに秘かに神の梅見かな終列車彼方に消えて螢かな
草餅のまだ暖かに子らを待つ羽田空港四万六千日の晴れ
雲水の峠を越ゆる蝶々かな半袖の亜米利加人や巴里祭
おのづから時の満ち来る桜かなその中のひときは小さき裸かな
花守も覚悟の上の花の漏り端居する人なきままに日が暮れて
牡丹やどかと置かれしランドセル切株に後の歲月蚊遣香
薔薇園の開園を待つ鉄扉かなすやすやと赤子ほのかに天花粉

踏切のかんかん照りの終戦日年号の来年変る炬燵かな
干柿に遠き西日となりにけり太陽と同じ丸顔雪達磨
包丁に林檎の種が付いてをる
菜箸と同じ長さの秋刀魚なり
童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声
切株は根を巡らせて虫の声
赤で消し赤で書き足す夜長かな
われの銀河なれの銀河へ重なりぬ
土くれの中の石ころ枯野原
切株に雪の帽子を被せやる

発掘を逃れし壺や山笑ふこんこんと泉古くて新しき
雲水の峠を越ゆる蝶々かな蟻一つ浮んでゐたる水たまり
密やかに秘かに神の梅見かな顔を先頭にして蛇進む
切株の春の雨こそ明るけれ終列車彼方に消えて螢舞ふ
煙突の「ゆ」の字をぬらす春の雨羽田空港四万六千日の晴れ
草餅のまだ暖かに子らを待つ半袖の亜米利加人や巴里祭
おのづから時の満ち来る桜かなその中のひときは小さき裸かな
花守も覚悟の上の花の漏り端居する人なきままに日が暮れて
牡丹やどかと置かれしランドセル切株の後の歳月蚊遣香
薔薇園の開園を待つ鉄扉かなすやすやと赤子ほのかに天花粉

踏切のかんかん照りの終戦日
年号の来年変る炬燵かな
童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声
太陽と同じ丸顔雪達磨
切株は根を巡らせて虫の声
われの銀河なれの銀河へ重なりぬ
干柿に遠き西日となりにけり
包丁に林檎の種が付いてをる
菜箸と同じ長さの秋刀魚なり
赤で消し赤で書き足す夜長かな
土くれの中の石ころ枯野原
切株に雪の帽子を被せやる

すやすやと赤子ほのかに天花粉切株に雪の帽子を被せやる
踏切のかんかん照りの終戦日年号の来年変る炬燵かな
童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声太陽と同じ丸顔雪達磨
切株の大きいなる根や虫の声
われの銀河なれの銀河へ重なりぬ
干柿に遠き西日となりにけり
包丁に林檎の種が付いてをる
菜箸と同じ長さの秋刀魚なり
黒で書き赤で書き足す夜長かな
土くれの中の石ころ枯野原

発掘を逃れし壺や山笑ふ 薔薇園の開園を待つ鉄扉かな
雲水の峠を越ゆる蝶々かな こんこんと泉古くて新しき
密やかに秘かに神の梅見かな 蟻一つ浮んでゐたるポリバケツ
切株に春の雨こそ明るけれ 終列車彼方に消えて螢舞ふ
煙突の「ゆ」の字をぬらす春の雨 羽田空港四万六千日の晴れ
草餅のまだ暖かに子らを待つ 半袖の亜米利加人や巴里祭
春宵も余生も値千金ぞ ~~噴水~~の如き夕立が噴水に
おのづから時の満ち来る桜かな その中のひときは小さき裸かな
花漏りを茶碗に受ける宴かな 端居する人なきままに日が暮れて
牡丹やどかと置かれしランドセル 切株の如き残生蚊遣の火

余生に

すやすやと赤子ほのかに天花粉切株に雪の帽子を被せやる
踏切のかんかん照りの終戦日年号の来年変る炬燵かな
童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声太陽と同じ丸顔雪達磨
切株の大きいなる根や虫の声
われの銀河なれの銀河へ重なりぬ
干柿に遠き西日となりにけり
包丁に林檎の種が付いてをる
菜箸と同じ長さの秋刀魚なり
黒で書き赤で書き足す夜長かな
土くれの中の石ころ枯野原

発掘を逃れし壺や山笑ふ牡丹やどかと置かれしランドセル
雲水の峠を越ゆる蝶々かな 薔薇園の開園を待つ鉄扉かな
密やかに秘かに神の梅見かな こんこんと泉古くて新しき
切株に春の雨こそ明るけれ 蟻一つ浮かべて小さき子のバケツ
煙突の「ゆ」の字をぬらす春の雨 母であり月でありたるくらげかな
草餅のまだ暖かに子らを待つ 終列車彼方に消えて螢舞ふ
春宵も余生も値千金ぞ 羽田空港四万六千日の晴れ
おのづから時の満ち来る桜かな 半袖の亜米利加人や巴里祭
花漏りを茶碗に受ける宴かな その中のひときは小さき裸かな
ひよろ長き蕊残りたる躑躅かな 端居する人なきままに日が暮れて

夕立の去つて静かな夕餉かな 菜箸と同じ長さの秋刀魚なり
 切株の如き余生に蚊遣の火黒で書き赤で書き足す夜長かな
 蚊遣火の紅一点の涼しさよ 土くれの中の石ころ 枯野原
 すやすやと赤子ほのかに 天花粉 切株に雪の帽子を被せやる
 踏切のかんかん照りの終戦日 年号の来年変る炬燵かな
 童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声 太陽と同じ丸顔 雪達磨
 切株の大いなる根や虫の声
 われの銀河なれの銀河へ重なりぬ
 干柿に遠き西日となりにけり
 包丁に林檎の種が付いてをる

発掘を逃れし壺や山笑ふ花散つて入園式のチューリップ
雲水の峠を越ゆる蝶々かなひよる長き蕊残りたる躑躅かな
密やかに秘かに神の梅見かな塩辛に烏賊や鰹や夏始
草餅のほのかな温み子らを待つこんこんと泉古くて新しき
切株に春の雨こそ明るけれ牡丹やどかと置かれしランドセル
煙突の「ゆ」の字をぬらす春の雨薔薇園の開園を待つ鉄扉かな
春宵も余生も値千金ぞ蟻一つ浮かべて小さき子のバケツ
金色の佛も眠る春の闇母のごとく月のごとくにくらげかな
おのづから時の満ち来る桜かな仕損じて次の間へ行く蠅叩
花漏りを茶碗に受ける宴かな飛ぶ虫に這ふ虫も来て梅雨入かな

△雨衣(あまのころも)

終列車彼方に消えて螢舞ふ切株に大いなる根や虫の声
羽田空港四万六千日の晴れ童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声
半袖の亜米利加人や巴里祭われの銀河なれの銀河へ重なりぬ
その中のひときは小さき裸かな干柿に遠き西日となりにけり
端居する人なきままに日が暮れて包丁に林檎の種が付いてをる
夕立の去つて物食ふ寂しさよ菜箸と同じ長さの秋刀魚なり
切株の如き残生蚊遣の火黒で書き赤で書き足す夜長かな
蚊遣火の紅一点の涼しさよ土くれの中の石ころ枯野原
~~す~~やすやと赤子ほのかに天花粉切株に雪の帽子を被せやる
踏切のかんかん照りの終戦日年号の来年変る炬燵かな

乳足りて腹を毒子の天竺

角川賞2018 ver.13 42句 p3

太陽と同じ丸顔雪達磨
雨の夜に螢は歩き赤子這ふ

2018年5月19日10:02

10行2段桐9

発掘を逃れし壺や山笑ふひよる長き蕊残りたる躑躅かな
雲水の峠を越ゆる蝶々かな塩辛に烏賊や鰹や夏始
白梅の秘かに神の梅見かなこんこんと泉古くて新しき
草餅のほのかな温み子らを待つ 薔薇園の開園を待つ鉄扉かな
切株のまだ新しき春の雨牡丹やどかと置かれしランドセル
煙突の「ゆ」の字をぬらす春の雨蟻一つ浮かべて小さき子のバケツ
春宵も余生も値千金ぞ母のごとく月のごとくにくらげかな
金色の佛を置いて春の闇仕留めては次の間へ行く蠅叩
おのづから時の満ち来る桜かな飛ぶ虫に這ふ虫も出て梅雨入かな
花漏りを茶碗に受ける宴かな雨の夜を螢は歩き赤子這ふ

終列車彼方に消えて螢舞ふ童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声
羽田空港四万六千日の晴れわれの銀河なれの銀河へ重なりぬ
半袖の亜米利加人や巴里祭干柿に遠き西日となりにけり
その中のひときは小さき裸かな包丁に林檎の種が付いてをる
端居する人なきままに日が暮れて黒で書き赤で書き足す夜長かな
夕立の去つて物食ふ寂しさよギター背に枯木の中を帰りけり
切株の如き残生蚊遣の火金銀を雪に散らしてクリスマス
蚊遣火の紅一点の涼しさよ土くれの中の石ころ寒椿
踏切のかんかん照りの終戦日切株に雪の帽子を被せやる
切株に大いなる根や虫の声太陽と同じ丸顔雪達磨

角川賞 2018 ver. 14 41句 p3

年号の来年変る炬燵かな

2018年5月19日20:30

10行2段 桐9

発掘を逃れし壺や山桜ひよる長き蕊残りたる躑躅かな
雲水の峠を越ゆる蝶々かな塩辛に烏賊や鰹や夏始
△白梅の秘かに神の梅見かなのたけなほにこんこんと泉古くて新しき
草餅のほのかな温み子らを待つ 薔薇園の開園を待つ鉄扉かな
切株のまだ新しき春の雨 牡丹やどかと置かれしランドセル
煙突の「ゆ」の字をぬらす春の雨 △母のごとく月のごとくにくらげかな
春宵も余生も値千金ぞ 壁抜けの遅参を悔むががんぼか
金色の佛を置いて春の闇 仕留めては次の間へ行く蠅叩
おのづから時の満ち来る桜かな 飛ぶ虫に這ふ虫も出て梅雨入かな
花漏りを茶碗に受ける宴かな 終列車彼方に消えて螢舞ふ

白梅と神のたんとこひけり
ま同にブツを履くまうとこ

羽田空港四万六千日の晴れわれの銀河なれの銀河へ重なりぬ
半袖の亜米利加人や巴里祭干柿に遠き西日となりにけり
その中のひとときは小さき裸かな包丁に林檎の種が付いてをる
端居する人なきままに日が暮れて黒で書き赤で書き足す夜長かな
夕立の去つて物食ふ寂しさよギター背に枯木の中を帰りけり
切株の如き残生蚊遣の火金銀を雪に散らしてクリスマス
蚊遣火の紅一点の涼しさよ土くれの中の石ころ寒椿
踏切のかんかん照りの終戦日切株に雪の帽子を被せやる
童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声太陽と同じ丸顔雪達磨く
切株に息の根のある虫時雨年号の来年変る炬燵かな

燵世に
炬燵の
燵を
燵す

燵す
燵す

発掘を逃れし壺や山桜ひよる長き蕊残りたる躑躅かな
雲水の峠を越ゆる蝶々かな塩辛に烏賊や鯉や夏始
白梅は神の梅見か匂ひ立つこんこんと泉古くて新しき
草餅のほのかな温み子らを待つ薔薇園の開園を待つ鉄扉かな
薄氷を置き切株の目覚かな牡丹やどかと置かれしランドセル
煙突の「ゆ」の字をぬらす春の雨飛ぶ虫に這ふ虫も出て梅雨入かな
春宵も余生も値千金ぞ母のごとく月のごとくにくらげかな
金色の佛を置いて春の闇壁抜けの遅参を悔むががんぼか
おのづから時の満ち来る桜かな仕留めては次の間へ行く蠅叩
花漏りを茶碗に受ける宴かな切株の如き残生蚊遣の火

蚊遣火の紅一点の涼しさよわれの銀河なれの銀河へ重なりぬ
終列車彼方に消えて螢舞ふ干柿に遠き西日となりにけり
羽田空港四万六千日の晴れ包丁に林檎の種が付いてをる
半袖の亜米利加人や巴里祭黒で書き赤で書き足す夜長かな
その中のひとときは小さき裸かな玄関にブーツを履いて立ち上る
端居する人なきままに日が暮れてギター背に枯木の中を帰りけり
夕立の去りて物食ふ寂しさよ金銀を雪に散らしてクリスマス
踏切のかんかん照りの終戦日煤籠る句帳の上の塵埃
童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声掃いて捨て掃いて捨てたる年の暮
切株に息の根残る虫時雨土くれの中の石ころ寒椿

切株に雪の帽子を被せやる
足跡や雪の動物園を行く
太陽と同じ丸顔雪達磨
年号の来年変る炬燵かな